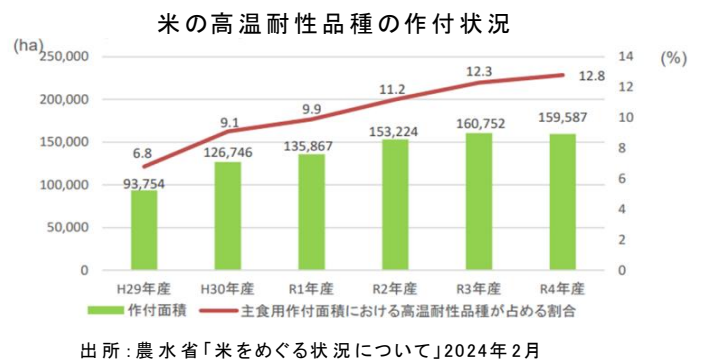


## 農作物で進む高温耐性品種の導入と開発

### ◆米の高温耐性品種の導入が年々増加

米などの農作物で、気候変動によるリスクが高まっている。2024年7月から顕在化した米の品薄状態も、23年の記録的な猛暑による品質低下が一因といわれている。通常の米は、穂が出てから平均気温が27度以上になると米粒が白濁する「白未熟粒」が発生しやすくなる。23年産米は、この白未熟粒などの高温障害が全国的に発生し、1等米比率が過去最低の61%に落ち込んだ。

高温対策としては水管理や施肥管理も重要だが、最も力を発揮しているのが「高温耐性品種の導入・転換」だ。農水省によると、米の作付面積に占める高温耐性品種の割合は年々増加しており、22年は12.8%となった。新潟県では、23年産のブランド米「コシヒカリ」の1等米比率が4.7%と過去最低だったのに対し、高温耐性品種の「新之助」は94.7%と着実に成果をあげている。



### ◆先端技術の活用で新品種開発を加速化する動き

高温耐性品種の開発は、ビール業界でも、主原料である大麦やホップの品質低下、収量の減少などで喫緊の課題となっている。キリンビールホールディングスは24年8月、東京大学発のスタートアップCULTA（カルタ）と共同で、気候変動に適応したホップの屋内栽培技術を確立したと発表した。通常ホップは屋外で夏季にしか収穫できないが、屋内栽培により1年に複数回の収穫が可能になり、品種改良や栽培技術開発の加速が期待できるという。共同開発を行ったCULTAは、農作物のゲノム解析技術と人工的に制御した環境の2つの技術を組み合わせた「高速育種技術」を強みとしている。東南アジアへの輸出向けのイチゴの新品種を、通常10年はかかるところ、わずか2年で開発した実績がある。

産地の「適地適作」を再検証する必要があるいま、農作物の気候変動リスクへの対応として高温耐性の品種開発が急務となっている。 【秋元真理子】